

## 〔研究ノート〕『今昔物語集』と近代作家（二） －菊池寛『好色物語』・『新今昔物語』の場合－

千 本 英 史\*

一、

敗戦後の菊池寛は、まことに惨めとしかいいようのない心象の裡にいた。

高松市菊池寛記念館から刊行されている中西靖忠『菊池寛伝 改訂版』（1993、この書は、1988年に高松市立図書館から「市民文庫シリーズ15」として刊行された「初版」の、注の体裁を一部改変し、巻末に略年譜を加えなどし、また巻頭の高松市長の「序」が一部書き換えられたりしているほかは、本文部分には一切の改変がないように思われる）は、「終章」で以下のようなエピソードを紹介している。

すなわち戦後、新潮文庫が復活し、菊池寛の『忠直卿行状記』（同著では同じ新潮文庫でのちに改題された『藤十郎の恋・恩讐の彼方に』を題目としてあげているが誤り）が文庫本として刊行（1948.3.20発行、その刊行は菊池の死後三週間目であった）されることとなったとき、編集にあたった高橋健二（1902-1998）が「誰に解説を書かせようか」と菊池に伺いを立てたところ、菊池が「ああ、僕が書くよ」と応じたというのである。

高橋が「解説は作者以外が書くことになっている」というと、「解説が第三者でなければならぬなら、吉川英治の名で出す。吉川君には僕から話しておくよ」と応じたという。そうして書かれた解説は、

この集には、菊池氏の初期の作品中、歴史物の佳作が悉く収められてゐる。これらの作品を見ても、菊池氏がリベラリストとして、その創作に依つて封建思想の打破に努めてゐたことがハッキリするであらう。（中略）戦ひに敗れた今日、改めて封建思想の打破が叫ばなければならないならぬほど、菊池氏としては、残念至極なことと思つてゐるであらう。

としていた。吉川英治の名を借りた、ほとんど菊池の遺言ともいふべき文章である。この時、菊池寛は戦時中の行動が問われ、公職追放の身であった。

菊池寛の伝記としては、彼自身の手になる『半自叙伝』（文芸春秋1928-9連載）があるが、本人以外の手になるものとしては、まず鈴木氏亨（1885-1948）の『菊池寛伝』（1937）が挙げられよう。鈴木は同書の「序」で久米正雄が「伝記者は、嘗て菊池寛の側近に師事して、文芸春秋創立の昔から、帷幄に参画した人、今は大衆文芸一方の雄で、記事の正確と流麗、併せ持つべきは言ふまでもない」とする通りである。鈴木自身も自序で、

この伝記は、氏に一言の断りもなし、勿論、氏から何らの容喙を聞くことなしに自由に書いた。これは氏の名譽のためにも、私自身の態度としても特に云つて置かなければならない。そして校正も殆んど出来て、九分通りこの仕事が終わつてから、始めて事情を打開けて承諾を

---

\* 研究院（人文科学系 言語文化学領域）教授）

得たのである。それだけに、この伝記は、他の多くの生前の伝記とその選を異にしていることを断つて置かねばならぬ。

といい、菊池が第一高等学校を辞して、結果東京帝国大学に進学することなく、京都帝国大学を卒業する原因となった、いわゆる「マント事件」（一高の同級生の佐野文夫が、他の寮生のマントを無断で持ち出し、菊池に質草に入れ換金させた事件。菊池は弁明せず一高退学を選ぶ。菊池は後に、寄宿先の主人の小切手の窃盗に置き換えた短編小説「青木の出京」1918を書いている）についても、「殊に一高でのマント事件は、幾度も幾度も書き変へた。これは氏の当時の境遇では分らないこともあるので、どうしても当時の同級の三四の人の説を参考にしなければならなかった。しかし、これとても諸説<sup>まちまち</sup>区々で一定しない。これでも如何に正確な史実を探ることの困難かがわかる」などとして、この伝記があくまで正確を期したものであったことを述べている。

佐野文夫（1892-1931）は、山形県米沢に佐野友三郎の長男として生を受け、第一高等学校から東京帝国大学哲学科に進み、第三次『新思潮』にも参加。大学中退の後、南満州鉄道調査課図書館勤務。日本共産党再建ビューロー中央常任委員、再建共産党委員長を経て、三・一五事件で検挙投獄され収監。1930年病氣療養のため仮出獄するが翌年死去した。仮出獄前後1929年8月から翌年11月までの日記が最近になって色川大吉監修で公刊された（『生きることに心せき』GREEN PLAZA研究所2016 前記佐野の経歴はその巻末記載による）。この「日記」に添えられた岸谷和氏の『佐野文夫「日記」解説にかえて 二〇一五年九月』と題されたB6版24頁の小冊子には、

ウィツキペデアによると、——菊池寛との関係には次のような異説もある。一高時代菊池は佐野に好意を寄せていたが、同性愛者でない佐野はこれを拒否し、菊池は佐野に対して憎さ百倍となった。…『青木の出京』内の佐野に関する記述には事実とかけ離れた部分も多い。マント事件が原因で、菊池寛が第一高校を退学になったというのは事実ではなく、実際には授業料の滞納と学力不足が原因である。——とある。私には実態は解らない。

とあるが、現在のWikipedia（2019.8.21閲覧）からは、こうした記述は消えている。

しかし、鈴木氏亨の『菊池寛伝』は1937年3月実業之日本社からの刊行で、十五年戦争の後半部分については、もちろんのこと記載がない。

戦時期の菊池寛の活動については、戦後に出版された、永井龍男『菊池寛』（時事通信社1961）などが比較的詳しく述べている。この著は「新今昔物語」の連載先を「新大阪新聞」とするような誤りもあるが、同じく作家であり、文芸春秋の専務職を勤めた経歴をもつ人の著作として参照すべき点が多いと考えられる。

同著は菊池側のスタンスによる伝記という色合いが確かに少なくないが、いまそれを中心として十五年戦争下以降の菊池の動きを追っておくと、

**1931.8** 「文芸春秋」誌上で「話の屑籠」連載 **12** 文藝春秋社「十周年記念愛読者大会」（日比谷公会堂）**〔9 柳条溝事件〕**

**1932.9** 右翼からの脅迫を拒否 **〔1 第一次上海事変 3 満州刻建国宣言 5「5・15」事件〕**

**1933** **〔3 国際連盟脱退〕**

**1934.1** 文芸懇話会を組織（「非常時で緊張するということは、言論を圧迫したり取締りを厳重にしたりすることではないと思う。この二十年来、今日ほど文筆生活が圧迫されてるような気が

することはない」)。

1935.1 芥川龍之介賞、直木三十五賞制定発表

1936.5 文芸家協会発足、初代会長に就任 10「軍に直言する座談会」→4頁分割除処分を受ける  
〔2「2・26」事件 11 日独防共協定〕

1937.4 東京市会議員となる〔7 盧溝橋事件 12 南京事件〕

1938.2 恒例の文芸春秋祭中止→傷病兵慰問献金へ 3「オール読物」皇軍慰問全集3万5千冊を  
陸海軍に献納 4 文芸春秋誌に、英独仏語での附録Japan Today 8 内閣情報部の要請により「文  
士部隊」を率いて中国へ赴く〔4 国家総動員法〕

1939.6 海軍省からの要請を受け、雑誌「大洋」発刊 3-9「西住戦車長伝」を新聞連載、単行  
本化の後 11 松竹映画公開〔4 ノモンハン事件〕

1940.4 南京訪問、新国民政府樹立式典参加（「僕は事変中は、国家から頼まれることは、何でも  
やるつもりだから、快諾した」）〔5 文芸銃後運動10 大政翼賛会〕

1941 〔12 対米英宣戦布告〕

1942.5 日本文学報国会創立総会議長11 第一回大東亜文学者大会（東京・大阪）出席（日本代表）  
〔6 ミッドウェー海戦〕

1943.9 日本編集者協会宣誓11 満州新江市に満州文芸春秋社設立〔2 ガダルカナル島戦〕

1944 満州国政府直轄の文芸雑誌『芸文』の発行を委嘱される〔10 レイテ沖海戦〕

1945 〔8 原爆投下、ポツダム宣言受諾、敗戦〕

1946.3 文芸春秋社解散、文芸春秋から身を退く 6佐佐木茂索らによる文芸春秋新社設立

1947.10 G・H・Qによる公職追放

1948.3 豊島区雑司ヶ谷の自宅で狭心症の発作により急逝

といったあたりが大きな節目となる（（ ）内の言動は永井龍男著書から引用）。

十五年戦争下の菊池の文筆上の直接の作品は、『西住戦車長伝』一編に留まり、この作自体は  
周辺人物からの聞書を主としたルポ型式で、戦意高揚のみを目指したものとも思えないが、即刻  
単行本化、映画化され、国民感情に訴えるところは少なくなかったらしい。漆原喜一郎（1928年  
生）の『浅草 子どもの歳時記』（晩成書房1990）には、「小学校六年生の時から学校の先生が引  
率して団体鑑賞をする制度ができた。大勝館（洋画の封切館）へ、『西住戦車長伝』（吉村公三監  
督、上原謙、佐分利信、笠智衆、桑野通子主演の松竹映画）や『民族の祭典』（レニ・リーフフェ  
ンシュタール監督、ベルリンオリンピック記録映画＝ドイツ映画）を見につれていってもらった  
ことも覚えている」などとも見える。この作品については、田中勳儀「菊池寛『昭和の軍神 西  
住戦車長伝』考一伝記小説・演劇・映画―」（『日本文学』60 巻11号2011.11）が手際よくまとめ  
ていて参考になる。

いずれにせよ、文壇の大御所として、侵略戦争協力の責任はやはり小さくない。ただ、1938年  
の「文士部隊」での中国派遣時でも、菊池はいっさい軍服を着てはおらず、同行の文学者達の中  
でもそれは目立っていた（本稿末尾掲載の〔写真1〕）。

## 二、

菊池寛の「リベラリスト」としての側面をよくあらわしていると考えられる二つの交流を確認しておきたい。一人は文芸春秋社創設時以来の編集者で、菊池が厚い信頼を置いた馬海松<sup>マヘッソン</sup>（1905-1966）であり、一人はプロレタリア文学者の中本たか子（1903-1991）である。

馬海松は「十六歳の時から日本大学で先生の講義を聴き、十九歳からずつと、その門下でお世話になり、仕事をし、学びした」（後述の自筆の『文芸春秋』記事）人物である。菊池は文芸春秋社から刊行していた『モダン日本』を独立させ、馬にその編集、刊行を任せた。馬は10巻12号と11巻9号を「朝鮮版」特集号として刊行している（『モダン日本朝鮮版1939』オークワ情報サービス2007、『同1940』2009として復刻されている。菊池は前者に「朝鮮の青年達」、後者に「朝鮮随感」と名付けた随筆を寄稿しているが、前者では関わりのあった二人の青年の好感を持たせるエピソードを紹介し、後者では新たに公募した「朝鮮芸術賞」（第一回受賞者が李光珠）について、「朝鮮の人達は、文学、音楽、舞踊などに、特に天分がありそうだから、奨励の仕方によつて、燦然たる芸術の花が咲くのではないかと思つてゐる」と記している。

菊池の馬海松に対する信頼は厚く、菊池寛記念館には、その結婚式で菊池寛が長女の瑠美子とともに、ウェディングドレス姿の新婚夫婦の両端に座っている写真も残っている。（〔写真2〕人物の同定は菊池家のメモによる）。

戦後になるが、『文芸春秋』1953年3月号には、馬海松「朝鮮に叫ぶひとびと―戦塵にまみれて―」（p.108～117）が掲載された。そのリード文には、

筆者は韓国人作家、若くして菊池寛に愛され、文芸春秋社に入社、のち独立してモダン日本社長となつた事は、あまねく人の知るところである。戦中故国にかへつて、その消息を気づかはれてゐたが、現在韓国従軍作家団々長として活躍しつゝある。

とある。内容は、「菊池寛と私」「韓国は先進してゐる」「妻に送る」「智異山行」「中東部戦線行」<sup>チリサン</sup>（寧越<sup>ヨンクオル</sup>=江原道）の五節からなるが、ソウルで混線して伝わった東京放送で菊池寛の死を知ったこと、韓国軍、国連軍に帯同しての戦線の報告、三人の子をなした細君への戦地からの手紙などが綴られている。

冒頭に紹介した『菊池寛伝 改訂版』の著者中西靖忠は、『讃岐文学』47号1993に「馬海松はどうしている―朝鮮民族への思い―」（文末に「平成三年四月了」とある）を、他の二編の短章（「寛が新聞記者になった日」「昭和の軍神 西住戦車長伝」とともに「菊池寛伝」こぼれ話」と題して掲載した。馬海松については、日本で入手できる現在唯一のまとまった論考といえよう。その論は詳細で、菊池の対朝鮮観についての分析も説得力のあるものとなっている。

中西は、菊池の植民地朝鮮に対する思いを、京都帝国大学に卒業論文として提出した「英国及愛蘭土の近代劇」1916の研究と関連づけているが、確認してみたが卒業論文自体は京都大学図書館にも保存されておらず、具体的にこれ以上の詳細な検討ができない。

## 三、

菊池寛の秘書役を勤めた佐藤碧子（1912-2008）は、佐藤みどり名で『人間・菊池寛』新潮社1961を出版し、年上の菊池と馬海松との双方に惹かれる若い女性の姿を描いた。

新潮社版の裏表紙には、川端康成の評が掲げられる。

「人間・菊池寛」の作者は、秘書として菊池氏の最もそば近くにいた女性で、この追憶風の作品は作者の私小説ともなり、菊池氏をモデルとした小説ともなっているが、この作者以外の者には知られぬ菊池氏がここに生かされて、得がたい記録でもある。秘書のころから私も著者に親しかつたので、作中のこともいちいち思い出されてなつかしくこれを読んだ。菊池氏は「一期一会」と言ったほど、この作者を愛し尊んだ。これはそれにむくいた作品と言える。

佐藤は川端とも懇意であり、川端の自死のあと十年余を経て、『瀧の音 懐旧の川端康成』恒文社1986を出版した。そこには菊池も馬もほとんど登場しないが、その中でかつての秘書生活を思い出す部分に幾度か登場するのが、中本たか子である。

(1930年)五月、作家の中本たか子が共産党員として検挙され官憲の拷問に耐えかねて発狂し、松沢病院に入院した。菊池先生が中本たか子を見舞を托されたのは暑中であつた。郊外世田谷松沢の松沢病院は、寺院のように静かな世外の環境にあつた。……先生から預かつた封筒を渡し、「退院なさったら、たずねて来るようにとおっしゃってました」「はい」何ごとにも、はいとより他に言わず、その眼は終始伏せられていた。……来るときに菊池先生に注意されて、マニキュアをおとし、指輪もはずしていたが、白麻のスーツに花飾りのついた白い帽子の私は、不当な見物人と受け取られているような気がして眼をそらし、言葉を失っていた。……共産党は支援者も罰せられた。中本たか子を見舞ったり、復帰後の生活を助けようとしていることを官憲に知られたら、菊池先生も、シンパとして何らかの制裁を受けるにちがひなかった。

中本は、山口県立山口高女を卒業、小学校教員を経て上京、江東区亀戸で争議支援活動に入り、1928年に菊池が文藝春秋社内に設けた文筆婦人会のメンバーでもあつた（メンバーには他に鳴海碧子1903-1989や石井桃子1907-2008などもいた）。1930年5月に共産党シンパとして検挙（後掲の中本の自伝に拠れば、この時点では非党員）、10月に市ヶ谷刑務所に投獄され、翌1931年2月精神科専門病院の都立松沢病院に強制入院させられた。中条（宮本）百合子1899-1951から勧められ、プロレタリア作家同盟に加盟。ハウスキーパーとして党の指令のもと同居した岩尾家定と、彼が豊多摩刑務所収監中に獄中結婚をする。岩尾は熊本の被差別部落出身の党員で、南満州鉄道の従業員を経て、モスクワ勤労者共産大学に学んだ幹部候補生であつた。これらの経緯は、十五年戦争のあとおよそ30年を経て書かれた自伝『わが生は苦悩に灼かれて』（白石書店1973）に詳しい。

九月比になってから、長谷川時雨氏が、わざわざ面会にきて下さった。わたしは母親にあつたようにうれしく、なつかしかつた（『女人芸術』を主宰した長谷川時雨1879-1941は、市ヶ谷刑務所にも掛け布団の差し入れをしている）。つぎに裁判所から判事もきて、調書をとった。ここで保釈願ひを書き、菊池寛氏にひきとってもらふことにした。十月十六日、保釈が決定し、わたしは菊池寛氏のつかいのものにむかえられて、松沢病院をやっとでて、社会にかえることができた。……わたしは、最初の日だけ、雑司ヶ谷にある菊池寛氏の自宅にとまったが、翌日から、築地の木挽町にある、文芸春秋社のクラブにひきとられた。

釈放後の中本について、『瀧の音』には、次のような記述が見られる。

左翼作家中本たか子は松沢病院を退院して、京橋木挽町の「文芸春秋倶楽部」にいる。倶楽部は待合風の三階建てで、二階は直木三十五の仕事部屋。中本たか子は、一階の奥の薄暗い部屋で原稿を書いている。プロレタリアのアジテーション。菊池先生の大パトロン性――。



1931年といえば、6月に3.15、4.16両事件の統一公判が開始され、対外的にも9月には「満州事変」が始まっている。その中で菊池寛が、共産党シンパとして投獄された中本に対してこのような「支援」を行っていることは注目していただろう。

1932年1月、中本は保釈の身でありながら、労働運動との連携のために工場労働者として非法的に川崎の現場に復帰するが、そのときのことを、「ここまでこぎつけてみると、わたしの保釈のために奔走してくれ、現在生活上のいっさいの負担をかけている菊池寛氏にたいして、心からすまなさで一ぱいとなった。また、同様に世話してもらった長谷川時雨氏にたいしても、あとの迷惑を考えれば、心がにぶってくる。じっさい、この二氏は、わたしが文壇の末席をけがしはじめたころから、どんなに多大な恩恵をあたえてくれたことか、筆舌にあげきれないのである」と述べている。

植民地朝鮮出身の馬海松や、現役のプロレタリア活動家の中本たか子に対する行動から見て、菊池がリベラリストとして戦時下を生きていたことは否定できない。それだけにいっそう自らの戦時下の行動が、結果として日本敗戦時の「荒廃」に直結していることに対する思いは深かったのではないか。

#### 四、

菊池が『今昔物語集』や『古今著聞集』などの、いわゆる中世説話文学から取材した作品を矢継ぎ早に書くのは、戦後になってからである。

菊池寛の日本古典を素材とした小説としては、1922年7月に『改造』四巻七号（1922.7）に掲載された「頸縊り上人」がよく知られている。この時菊池はまだ30台の前半の年齢で、文芸春秋も立ち上げていない。この小説は略本系の『沙石集』巻四一六「頸縊り上人の事」に取材したもので、ぶらりと山本有三（1887-1974）の家を訪れた菊池が「明日までになにか書かなくちゃならない」と山本から『沙石集』を借りていき、一晩で書き上げたという逸話（「金山の家のことなど」文芸春秋新社版文学全集月報）でも知られる作品である。この作品についても志村有弘氏の『日本の説話』6近代（東京美術1974）など、研究論文がすでにいくつか公刊されているが、志村氏のもの除いて、梵舜本を定本とした岩波古典文学大系1966を「原典」として考察を加えているらしいことは問題である。菊池が山本から借り受けた1922年には、『沙石集』はまだ筑土鈴寛の校訂になる岩波文庫本1943はおろか、藤井乙男校訂の『校註沙石集』文献書院1928も刊行されていない。

国会図書館のデータベースで、この時期に刊行されていた『沙石集』を検索すると、おそらく山本は、版本もしくは1892（明治25）年5月刊行の法蔵館版もしくは1894（明治27）年8月刊行の西村九郎右衛門版の活字本を貸与したと見ることができる。この二種の活字本は序文などを見るにいずれも江戸時代に広く読まれた正保4年版本を底本としている。仮に菊池が法蔵館版によったとすれば、その題名は「頸<sup>クビクハリ</sup>縊<sup>ハリ</sup>上人<sup>ノコト</sup>事」となっていて、菊池がことさらに題名を変更したわけでないことも明らかである。

それはともかくとしても、菊池の小説と略本系の『沙石集』を比較すると、菊池が上人の心理に分け入って話を進めていることがわかる。つまりこの時点では、菊池も芥川などと同じように、古典世界のうちに近代の感覚を見いだそうとする方向性を持っていた。

しかし、敗戦後になって菊池によって書かれた『好色物語』や『新今昔物語』では、そうした登場人物の心理の襞に分け入って筋を進めていくといった姿勢は見られない。

『好色物語』は、1947年、大阪の毎日系の夕刊紙（当時は大手新聞社も夕刊の刊行が認められていなかったの夕刊専門の系列紙が多く刊行された）『新大阪』に掲載された新聞小説である。『新大阪』については、2006年に復刻版が刊行され（以下の本文引用もそれによった）、別冊解説・主要記事索引2007に浦西和彦氏の「《夕刊流星号》の光芒―「夕刊新大阪」について―」（後に『浦西和彦 著述と書誌』第二巻2009に再収）があり、また同社社員でもあった足立巻一氏の『夕刊流星号―ある新聞の生涯』1981の著作もある。戦後のリベラルな論調を長く保ったメディアであった。主筆をつとめた井上吉次郎は後、関西大学教授となり、同大学新聞学科を率いた。関西大学新聞学会から『井上先生古稀記念 新聞学論集』（関西大学新文学研究別冊1960）が刊行されている。以下、『新大阪』掲載の詳細については、本稿末尾に付した「〔別表1〕『好色物語』典拠・出典一覧」に示した。

『好色物語』の単行本には二つの版がある。1948年6月刊の三島書房版（発行者は三島源治郎で、三島書房は現在の大阪市中央区谷町にあった出版社である。「あとがき」や解説などは付されていない）と、1951年9月に藤沢閑二（菊池寛の長女瑠美子の婿）の二十世紀日本社から刊行された、『好色物語』と『新今昔物語』十編を収めたものとである。

後者に付された河上徹太郎（1902-1980）の「あとがき」は「終戦直後、私は菊池氏と大塚駅だかのプラットフォームで会ったことがある」と書き出し、「氏のいつもの洪面は、一層濃く、たゞ一言「厭な世の中になつたね、君。」といい棄てゝ、反対側の電車に乗つて立去つた」とその頃の菊池のようすを示している。

こゝに集められた「好色物語」や「新今昔物語」は、その時に続く戦後の氏の作品で、恐らくこの時期の最も代表的なものであり、事によるとこの頃の唯一の作品である。そしてこれを書いた作者の心は、当代を「厭な時代だ」と観ずる所のものであり、描かれた材料は「厭な時代」もの<sup>（ママ）</sup>でもある。菊池氏の作品は、これを大別すると、初期の「啓吉物」と称せられる私小説の系列から、一世を風靡した注記の長編新聞小説の時代を経て、晩年では、量は少なくともこの一連の物語が其れ等に対立する第三期の時期を画するものとして揚げるべきであろう。しかもその中で、或はこの第三期のものが、氏の長年の学識や人生経験をつぎ込み、最も作者の胸の嘆きが通つていて、その点で第一期のものよりも結果に於て一番はつきりと作者が出ているのではあるまいか。

また、文芸春秋新社版の『菊池寛文学全集』（1960）の巻末解説でも、山本健吉（1907-1988）が、同巻の所収作品を三つに分け、「第三の作品群は、『新今昔物語』と『好色物語』とで、昭和二十一、二年の作である。これは、小説でも歴史でもない。強いて言えば、古説話其俣と言うべきか。『今昔物語集』その他の説話を、自由な口語体書き直したもの。読書余録と言ってもよく、作者の晩年の自適の心境が現れているといえようか」として芥川と比較しつつ、

彼（菊池）は、何等小説に仕上げようという成心なしに、淡々と原話の筋書を叙べて行くだけである。だが、その恬澹さが、一種の達人的な風韻を帯びて、あたかも豊富な人生経験を経てきた古老の茶飲咄に聞き入るような感銘を生み出す。それとて、なまなましい野性美と言うには、あまりに淡泊であろう。

としていた。

この時期の菊池にとっての『好色物語』の意味をよく示しているといつてよいように思われるが、どうだろうか。

山本は、第十八話の「鳴神上人」(原話は今昔物語集巻20-7の「染殿后、為<sup>てんぐのためのわうらんせらるること</sup>天宮被<sup>むし</sup>燒乱語」)について、原話の「どぎつさはまったくなく、愛欲のために鬼と化した聖人が染殿后と人目とはばからず交接する場面を、「菊池が今日の言葉に写し取ることを見合わせ」ていることを指摘している。

菊池は、第一話の「大江ノ定基」でも『今昔物語集』の表現として著名な、自らの道心を確認するために、雉を「生<sup>むし</sup>乍<sup>むしり</sup>ラ持テ来テ揃<sup>むし</sup>ラスルニ、暫クハフハフト為ルヲ引<sup>かほ</sup>カヘテ、只揃<sup>むしり</sup>ニ揃<sup>むし</sup>レバ、鳥、目ヨリ血ノ涙ヲ垂テ、目ヲシバ叩キテ彼レ此レガ貞<sup>かほ</sup>ヲ見ル」といった場面もまったく現代語に写していない。第九話「平仲」でも、本院の侍従への執着を断ち切ろうとした平正文が、その排泄物を下女から奪い取るところ、「人モ不見ヌ所ニテ走り寄テ宮ヲ奪ツ。女ノ童泣タク惜メドモ、情無ク引<sup>かほ</sup>奪テ走り去テ」とあるのなども、「[まじないに使いたいのだ。ぜひかしてくれ。]」といったが、下女は笑いながら逃げてしまつた」と書き改められる。これらの例は、菊池が『今昔物語集』に内在する「情念」といったものとさえ、一定距離をおいてストーリーを追っている様子を示しているようである。

第十五話「ついに逢ふ身」は、堀辰雄によって「曠野」と題されて小説化され(『改造』1941.12)、堀の代表作の一つに数えられる作品である。ここでも菊池は、堀の落魄した姫君の心理に分け入った叙述を志向することがないだけでなく、『今昔物語集』巻30-4とも『伊勢物語』62段とも異なつて、人物のいわば「外側」を流れていく「ことがら」を淡々と記述する。

第十七話「街道の厄難」は、芥川龍之介の「藪の中」と原話を一にする(『今昔物語集』巻29-23)。これに対して菊池はこんなコメントを付している。

芥川の「藪の中」に依ると、この亭主が死んだことになつて居る。そして、その死因について、この強盗の話と、女の話と、この死んだ男の死霊の語る話とが、みんな違つている。……芥川は異常な不孝に逢つた男女の心境を中心にして、三通りの事件を想像したのである。ところが、原作では妻はそれほど責任を感じていないのである。凡てを、良人の責任として、良人を非難しているのである。現代では、良人の責任のある場合でも、妻がこんな目に逢うと、自分で責任を持つし、良人も又妻に責任を持たせるであろう。

登場人物のいわば「外側」を流れていく「ことがら」、その「ことがら」に翻弄される(というより、これまたただただ流されていく)人々。書き手の菊池はそれをじっと「見つめている」だけのようと思われる。

もう一つだけ、例を加えよう。『今昔物語集』巻22-8を素材とする第十話「時平の女事」である。これもまた後の谷崎潤一郎の「少将滋幹の母」毎日新聞連載1949-50に繋がっていく話だが、本研究年報の前号の「[研究ノート]『今昔物語集』と近代作家－今東光と杉浦明平の場合－」2019.3において、今東光(菊池寛との親密な関係についてはいまさら確認するまでもないだろう。『東光金蘭帖』1959など)が時平に連れ去られていく若い妻に対して、

「おい、ばあさん、わしを忘れるではないぞ。」わざと“ばあさん”と言ったところが、大納言の万感の思いがこもって、泣かせますな。



と読み解いているような方向性はもとよりないのである。菊池はこの話の末尾には「こう書いて来ると、時平など菅宰相をおとし入れるし、伯父さんの夫人は奪うし手もつかれない不良のようではあるが、かならずしもそうでないところがある」として、醍醐天皇と示し合わせて服飾の華美を戒めたという話を、『今昔物語集』の該当話から除外することなく書き加えている。

## 五、

『好色物語』に続けて書かれた『新今昔物語』にも、単行本にまた二つの版がある。

1947年11月に（この時菊池はまだ存生である）、雑誌『苦楽』に連載された九編に、『小説倶楽部』1947年7月号掲載の「弁財天の使」一編を加えて、柊屋書店（発行者は本橋錦市とある）から刊行されたものと、菊池の死後1948年7月に芝書店から刊行されたものの二種である。後者は「偷盗伝」「奉行と人相学」「好色成道」の三編が新たに加えられ、巻末の「あとがき」で、藤沢閑二（菊池寛の長女瑠美子の婿）は、雑誌『苦楽』に、「新今昔物語」と名づけられて毎号掲載された九編と、その他に単独で発表された同じジャンルに属すべき四編を併せて一冊としました」と書いている。

さらに、高松市菊池寛記念館が刊行した『菊池寛全集』（1993-5）の第四巻（この全集は全二四巻からなり、同記念館刊、文藝春秋社発売、これを受けて同じ装丁で「補巻」第一巻～第五巻1999-2003が武蔵野書店〔古典国文系の出版社である武蔵野書院とは別会社〕から刊行された）では、

藤沢氏が「他の完本に収録された四、五篇」といふのは、現在のところ……の三篇しか見当たらない……本全集では、この三篇を改めて『新今昔物語』のなかへ移すこととし、さらに、今日までに入手し得た以上のほかの六篇を収録して、増補することとした」（このあたり少し混乱があるらしい）

として、『新今昔物語』として、菊池の絶筆となる無題の断章（この断章については石岡久子「菊池寛の絶筆と『新今昔物語』」文芸もず三号2002に詳しい）を含め、総計して二十一話を収めている（末尾の「〔別表2〕『新今昔物語』典拠・出典および菊池寛記念館所蔵原稿一覧」）。この絶筆となった断章について、石岡氏はこれを『新今昔物語』の直接の続編かのように位置づけているが、問題が残る。

菊池寛の葬儀については、その孫にあたる菊池夏樹氏（1946-、菊池寛記念館名誉館長）の『菊池寛急逝の夜』（白水社2009）が詳しい。そこでも引かれているが、毎日新聞1948年3月8日には、その訃報記事が

六日午後九時十五分豊島区雑司ケ谷一の三九二の自宅で狭心症で死去、六十一歳、八日に通夜、九日密葬の上、十二日午後一時から二時まで護国寺で久米正雄氏を葬儀委員長に告別式を行う、氏は六日夕胃腸病の全快祝いに主治医大堀泰一郎氏らを招いてすしを食べ九時頃中座して突然苦しみ出したもので直ちに手当したが数分で息をひきとつた、同日書いた約五枚の題未定歴史ものが絶筆となつた（以下経歴紹介部分は略す）

と出ている。この「同日書いた約五枚の題未定歴史もの」が問題となるが、その原稿およびそれを掲載した雑誌『富士』1948年9月号が、ともに高松市菊池寛記念館に所蔵されているので、検討しておきたい。

菊池の『新今昔物語』を扱った先論には、前田雅之氏に「菊池寛『新今昔物語』—大衆社会と古典の屈折なき出会い—」（解釈と鑑賞57巻5号1992.5）がある。氏はさすがに、『苦楽』に連載された九編だけに絞って論を展開しているが、「九編中、『今昔物語集』に取材した話は三（二）編に留ま」り（前田氏は「(3) 心形問答」は同話の『宇治拾遺物語』に取材しようとする）、「菊池が『今昔物語集』といふ作品を特別に意識していたとは考えられない」としたうえで、内容的には相違するが、「(5) 龍」と同題の作品が芥川龍之介にあり、「これ以外にも、「心形問答」（芥川『道祖問答』）があり、追加の四編（芝書店版のこと）にも「偷盗伝」（芥川『偷盗』）・「好色成道」（芥川『好色』）という類似した題名をもつ、別内容であるものの同じく説話に取材した作品群がある」ことから、「菊池が旧友芥川の『今昔』ものを意識して「新」を付した『今昔物語』を書いたのではないかという推測が生まれ」として、「仮りに意識していたとするなら、執筆目的は『今昔物語集』の芥川的受容に対する反措定ないしは「もどき」ということになるのか」という。魅力的な説だが、すぐに賛同することはむずかしい。

『苦楽』掲載の順に、収録九話を並べ替えると、「(1) 六宮姫君」、「(9) 狐を斬る」、「(8) 学者夫婦」、「(7) 大雀天皇」、「(3) 心形問答」、「(4) 三人法師」、「(5) 龍」、「(6) 伊勢」、「(2) 馬上の美人」の順となる。柊屋書店版が、『苦楽』連載外の「(10) 弁財天の使」を最後に配列したのはともかく、九話をなぜこのような順に並べたかはわからない。いずれにせよ、連載時でも単行本でも「(1) 六宮姫君」が最初であることは動かない。幸いに「(1) 六宮姫君」の原稿は、これも高松市菊池寛記念館に所蔵されている（本稿末尾にその冒頭の一葉を〔写真3〕として掲げた）。ここに見られるように、『新今昔物語』という題目（さらには「六宮姫君」という表題すらもが）、果たして菊池寛の付したそれであったかどうかさえ、そもそも疑われるのである。

村松梢風（1889-1961）の『芥川と菊池／出版の王座』（読売新聞社1961）は、1965年9月から翌年1月まで読売新聞に連載されたものをまとめ、後に新潮社創業者の佐藤義亮の伝記と合わせて、「梢風名勝負物語」シリーズの一冊として刊行されたものである。菊池や芥川と同時代に文壇で活躍した文筆家による評伝なので、興味深い書となっている（文中にもしばしば「<sup>わたし</sup>筆者」が登場して、菊池や芥川と直接に交渉を持つ）が、村松の芥川評は、「いかに芥川の文章が清新であるといっても、こういう日本古典の翻訳に近い作品をどうして全文壇があんなに騒いで賞讃したのか、筆者は当時も今も不可解である」と低評価である。そうして、「あの小説（『無名作家の日記』）の中で菊池は、自分を常に劣敗者の立場におき、芥川を勝利者として……芥川に対する及び難い競争心、むしろ敵愾心、反感、嫉妬の心理を書き尽くしているように見えるけれども、それは小説の一つのテーマであって、実際の菊池は、芥川をそれほど高く評価してはいない」とまで言う。

村松の評価はともかくとして、戦時中の不本意な生活を経て、晩年に至った菊池が『今昔物語集』にもとめたものは、自分の思いとは無関係にすれ違い、自分の外側を流れていくさまざまな「ことがら」の蓄積にほかならず、かつての芥川がその内に近代の人間存在の不安定さを見いだそうとしたそれとは、当初からかなり光景を異にしていたことは、認めておいてよいのではないだろうか。

〔別表1〕『好色物語』典拠・出典一覧

〔題名〕	〔典拠〕	〔夕刊新大阪掲載日時〕	〔備考〕
(1) 最初の言葉 (一)	—	1947.6.12	
(2) 最初の言葉 (二)	今昔巻16-33	1947.6.13	
(3) 最初の言葉 (三)	〃	1947.6.14	
(4) 第一話 大江ノ定基 (一)	今昔巻19-2	1947.6.16	
(5) 第一話 大江ノ定基 (二)	〃	1947.6.17	
(6) 第一話 大江ノ定基 (三)	〃	1947.6.18	
(7) 第二話 狩場の雨 (一)	今昔巻22-7	1947.6.19	
(8) ——— 狩場の雨 (二)	〃	1947.6.20	表題に話数表記なし
(9) ——— 狩場の雨 (三)	〃	1947.6.21	
(10) 第三話 密会厄難 (一)	今昔巻23-16	1947.6.23	
(11) 第三話 密会厄難 (二)	〃	1947.6.24	
(12) 第四話 八幡太郎の愛人	古今著聞集339	1947.6.25	
(13) 第五話 鳴門中将物語 (一)	古今著聞集331	1947.6.26	
(14) ——— 鳴門中将物語 (二)	〃	1947.6.27	
(15) 第五話 鳴門中将物語 (三)	〃	1947.6.28	
(16) 第五話 鳴門中将物語 (四)	〃	1947.6.30	
(17) 第五話 鳴門中将物語 (五)	〃	1947.7.1	
(18) 第五話 鳴門中将物語 (六)	〃	1947.7.2	
(19) 第六話 衣更	今昔巻28-12	1947.7.4	七月三日休載
(20) 第七話 密会厄難	今昔巻26-4	1947.7.5	
(21) 第八話 盗人の良心	今昔巻29-13	1947.7.7	
(22) 第九話 平仲 (一)	今昔巻30-1	1947.7.8	
(23) ——— 平仲 (二)	〃	1947.7.9	
(24) 第九話 平仲 (三)	〃	1947.7.10	
(25) 第十話 時平の女事 (一)	今昔巻22-8	1947.7.11	
(26) ——— 時平の女事 (二)	〃	1947.7.12	
(27) ——— 時平の女事 (三)	〃	1947.7.14	
(28) 第十一話 大力物語 (一)	古今著聞集377	1947.7.15	
(29) 第十一話 大力物語 (二)	古今著聞集377・381	1947.7.16	
(30) 第十一話 大力物語 (三)	古今著聞集381	1947.7.17	
(31) 第十一話 大力物語 (四)	今昔巻23-17・巻23-18	1947.7.18	
(32) 第十一話 大力物語 (五)	今昔巻23-18	1947.7.19	
(33) 第十一話 大力物語 (六)	今昔巻23-24	1947.7.21	
(34) 第十一話 大力物語 (七)	今昔巻23-19・巻23-20	1947.7.22	
(35) 第十一話 大力物語 (八)	今昔巻23-20	1947.7.23	
(36) 第十二話 女強盗 (一)	古今著聞集433	1947.7.24	
(37) 第十二話 女強盗 (二)	〃	1947.7.25	
(38) 第十二話 女強盗 (三)	今昔巻29-3	1947.7.26	
(39) 第十二話 女強盗 (四)	〃	1947.7.28	

(40) 第十二話	女強盗 (五)	〃	1947.7.29
(41) 第十二話	女強盗 (六)	〃	1947.7.30
(42) 第十三話	ばくち (一)	古今著聞集423	1947.7.31
(43) 第十三話	ばくち (二)	〃	1947.8.1
(44) 第十三話	ばくち (三)	〃	1947.8.2
(45) 第十四話	あし刈り (一)	今昔巻30-5	1947.8.4
(46) 第十四話	あし刈り (二)	〃	1947.8.5
(47) 第十五話	ついに逢ふ身 (一)	今昔巻30-4	1947.8.6
(48) 第十五話	ついに逢ふ身 (二)	〃	1947.8.7
(49) 第十五話	ついに逢ふ身 (三)	〃	1947.8.8
(50) 第十六話	石のまないた (一)	今昔巻29-28	1947.8.9
(51) 第十六話	石のまないた (二)	〃	1947.8.11
(52) 第十六話	石のまないた (三)	〃	1947.8.12
(53) 第十六話	石のまないた (四)	〃	1947.8.13
(54) 第十六話	石のまないた (五)	〃	1947.8.14
(55) 第十七話	街道の厄難 (一)	今昔巻29-23	1947.8.15
(56) 第十七話	街道の厄難 (二)	〃	1947.8.16
(57) 第十七話	街道の厄難 (三)	〃	1947.8.18
(58) 第十七話	街道の厄難 (四)	〃	1947.8.19
(59) 第十七話	街道の厄難 (五)	今昔巻29-19	1947.8.20
(60) 第十八話	鳴神上人 (一)	今昔巻20-7	1947.8.21
(61) 第十八話	鳴神上人 (二)	〃	1947.8.22
(62) ——	鳴神上人 (三)	〃	1947.8.23
(63) 十八話	鳴神上人 (四)	〃	1947.8.25
(64) 十九話	外術 (一)	今昔巻20-10	1947.8.26
(65) 十九話	外術 (二)	〃	1947.8.27
(66) 十九話	外術 (三)	〃	1947.8.28
(67) 十九話	外術 (四)	〃	1947.8.29
(68) 十九話	外術 (五)	〃	1947.8.30
(69) 二十話	競馬と角力 (一)	—	1947.9.1
(70) 二十話	競馬と角力 (二)	平家物語「名虎」	1947.9.2
(71) 二十話	競馬と角力 (三)	古今著聞集481	1947.9.3
(72) 二十話	競馬と角力 (四)	古今著聞集367	1947.9.4
(73) 二十話	競馬と角力 (五)	—	1947.9.5
(74) 二十話	競馬と角力 (六)	古今著聞集372	1947.9.6
(75) 二十話	競馬と角力 (七)	古今著聞集382	1947.9.8
(76) 二十話	競馬と角力 (八)	〃	1947.9.9
(77) 二十話	競馬と角力 (九)	今昔巻23-25	1947.9.10
(78) 二十話	競馬と角力 (十)	〃	1947.9.11
(79) おわりの言葉 (一)	—	—	1947.9.12
(80) おわりの言葉 (二)	—	—	1947.9.13



一九四七（昭和二二）年の六月十二日から九月十三日まで、全部で八十回の連載である。毎週日曜日は休載、第18回「鳴門中將物語」が（一）から（六）まで続いた翌日の七月三日だけは木曜日だったが休載となっている。

全体の前後に「最初の言葉」、「おわりの言葉」を置いて、あとはテーマごとに「第一話」から「第二十話」まで番号が振られるが、時にその番号表記が抜け落ちることもある（第8,9,14,23,26,27,62回）。またどういう理由からか、「第十八話」の途中からは「第」の字が付されなくなる。

『新大阪』は表裏二面の一枚物の新聞だったが、めずらしく横版（1行15字詰め12行組）で、第二面の下部2段B分の広告欄の上、左側の2段組が連載小説欄となっていた。『好色物語』の挿絵は、終始中村貞以（1900-1982）が担当した。貞以は大阪船場生まれ、北野恒富門下の画家だが、幼時両手に火傷を負い、指が自由にならないために両方の掌に筆を挟み込んで描く（合掌描）方法で、みずみずしくも毅然とした表情の女性を描き続け、日本美術院理事などもつとめた。

【別表2】『新今昔物語』典拠・出典および菊池寛記念館所蔵原稿一覧

〔題名〕	〔典拠〕	〔掲載誌〕	〔記念館原稿番号〕
(1) 六宮姫君	今昔巻19・5・今昔巻30・8	『苦楽』	1946.11 原稿No.100
(2) 馬上の美人	〃	〃	1947.7 原稿No.50 ～ 52☆
(3) 心形問答	今昔巻14・29	〃	1947.3 原稿No.49☆
(4) 三人法師	〃	〃	1947.4 原稿No.44 ～ 48
(5) 龍	〃	〃	1947.5 原稿No.53
(6) 伊勢	今昔巻24・31	〃	1947.6 原稿No.43
(7) 大雀天皇	古事記（中巻）	〃	1947.2
(8) 学者夫婦	蜀山人『仮名世説』	〃	1947.1 原稿No.11
(9) 狐を斬る		〃	1946.12
(10) 弁財天の使		『小説倶楽部』	1947.7
——— 以上柊屋書店版1947.11刊収載／二十世紀日本社版『好色物語』1951.9併載			
(11) 儼盗伝	古今著聞集441	『モダン日本』	1948.1
(12) 孝行と人相学		『小説と読み物』	1948.4
(13) 好色成道	今昔巻17・33	『小説の泉』	1948.3 原稿No.25
——— 以上芝書店版1948.7刊／文芸春秋新社版『菊池寛文学全集』五1960所載『新今昔物語』収載			
(14) 潔癖		『小説倶楽部』	1946.9
(15) 大力物語	今昔巻23・21・巻23・24	『ダイヤ』	1947.1※
(16) 街の勇士	今昔巻23・15	発表誌未詳※	
(17) 地獄よりの使		『サンデー毎日』	1947.9.21
(18) 有花無鳥		『世間』	1948.2
(19) 平太郎の恋	三浦浄心『慶長見聞録』	『富士』	1948.2
(20) 女鳥王	古事記（中巻）	『富士』	1948.3
(21) （無題）	今昔巻29・12	『富士』	1948.5 原稿No.93
——— 高松市菊池寛記念館『菊池寛全集』四1994所載『新今昔物語』収載			

「記念館原稿」の番号は、『菊池寛記念館収蔵資料目録』2015の「原稿（寛自筆）」の整理番号、その後に☆印のあるものが緑色印刷の原稿用紙に書かれたもの、他はいずれも「六友書屋箋」（六友書屋は菊池寛の書斎の名）と印刷された青色印刷の原稿用紙に書かれている。

掲載誌については、高松市菊池寛記念館『菊池寛全集』第四巻1994の解題の記載によった。現時点で稿者には初出誌を確認できていないものが多い。※の二編は『女心軽佻』（榊原書店1947、「頸縊り上人」を含む十篇の最終二篇）に依るとされ、(16)「街の勇士」の出典雑誌は明らかにされていない。なお単行本の『女心軽佻』には解説、出典などの記載はない。(10)「弁財天の使」の出典を全集は『小説倶楽部』（1946.9）とするが、(14)「潔癖」の載る洋洋社版の『小説倶楽部』（同号が創刊号、神田区神保町二ノ四、編集人岩崎純孝、発行人吉岡吉次）の同月号には掲載がない。なお創刊号の「編輯後記」には「菊池寛氏の「潔癖」にいたつては、正に絶品であらう。同氏は、この素材を以て作品を書かうと、既に十数年前から、脳裡にその醗酵を待つてゐられたといふ。終戦後一、二の作品を発表されてゐるが、この作品こそは、初期の菊池文学に見られる氏独特の人生諷刺の色を強く出されてゐる傑作である」とある。二図掲載の挿絵は斎藤五百枝が担当している。

(19)「平太郎の恋」以下の三作は、世界社から刊行された雑誌『富士』に継続して掲載され、またその予定であった作品である。『富士』の1948年2月号は「新春復刊特大号」と銘打たれ、「昔の『富士』は昭和三年一月に、講談社から創刊され、昭和十六年末、出版界企業整備の第一着手として、多くの読者の哀惜を受けつゝ、廃刊された。今度小社が講談社から、『富士』の発行権を譲り受け、これを復刊したのは、今度『富士』のやうな大衆娯楽雑誌が、不足してゐるのと、『富士』といふ名前に、深い愛着を覚えるからである」とするが、発行所の世界社の住所は、文京区音羽町三丁目一九番地（編集兼発行人土田喜三）とあり、講談社系の子会社であつたらしい。(19)「平太郎の恋」は「純愛無限」と題され（挿絵は清水三重三）、(20)「女鳥王」は「王朝哀史」と題されていて（挿絵は吉村忠夫）、「新今昔物語」として連作する意図はここでも感じられない。(21)「無題」は、同じ『富士』1948年5月号（第一巻第四号大傑作満載薫風号）に「菊池寛先生の絶筆（遺稿）」（目次）として掲載された（p.44～6）。冒頭に中野実（1901-73）の「菊池先生」と題した追悼文および富士編集部「絶筆玉稿について」を配している。後者では、「先生は『富士』に対しては特別のご厚意を持たれ、富士の原稿を執筆中に急逝されましたことは、ぜひ共愛読者皆様にお伝えねばならぬことと存じます。富士の原稿が巨匠菊池寛先生の絶筆となつたのであります。未刊であり、題名もまだつけてなく、世に発表することは、御遠慮申すべきかとも考へましたが、文豪菊池寛先生の絶筆、歴史的な文章といった意義を思ひ、又、先生が特別愛情を持たれた富士愛読者皆さまと共に、先生を悼むよすがとして、茲につゝしんで掲載いたします」と掲載に至る経緯が述べられている。目次部分、題目などいずれにも『新今昔物語』の字句は見えない。

なお蛇足となるが、文芸春秋社は、1988年2月雑誌『オール読物』で「菊池寛生誕100周年記念特集」を組み、井上ひさしにこの絶筆の続編（「唐黒の壺」）を執筆させている（挿絵二図は原田維夫1939-が担当）。オール読物編集部名の「唐黒の壺」完成までの経緯」と題した文章では、「この小説は、昭和三十三年三月、雑誌「富士」（世界社）に「新今昔物語」の原稿を依頼された菊池寛が、執筆中急逝したことで絶筆となった作品に、井上ひさし氏が後を継いで完成させたもの

です」とあり、井上ひさしが原稿用紙約30枚分（記念館に残る絶筆原稿は5枚だけなので、およそ6倍もの分量である）を加筆し、新たに題名（「唐黒の壺」、井上は文中で「唐黒とは唐渡りの黒砂糖のことである」と書いていて、まだ表題の「唐黒」には「とうぐろ」とルビが付されているが、いま日本国語大辞典ほかいくつかの辞書を参照しても、そのような語句は見当たらず、あるいは井上の創案ではないかと思われる）を付して小説を作り上げた。「編集部」がいう、「『新今昔物語』の原稿を依頼された菊池寛」が、誤りであることはすでに確認したとおりである。また井上の「唐黒の壺」では、そもそも『今昔物語集』巻20-19にはまったく登場しない「唐黒の壺」なる素材が小説の中心になっていて、菊池の方法とは大きく異なったものとなっている。



〔写真1〕1938年中国大陆に出発する「文士部隊」（菊池家蔵、菊池寛記念館寄託）

内閣情報部の要請に応じて「文士部隊」が結成され、菊池が中心となって文芸家協会から22人が中国本土へ渡った。写真は左から、佐藤春夫、菊池、小島政二郎、浜下浩、北村小松、吉屋信子、吉川英治（人名は菊池寛記念館の写真メモおよび新潮日本文学アルバムによる） 両端の佐藤、吉川がほぼ完全な軍装で、ただ一人の女性の吉屋信子もそれに準じた服装をしている中、菊池一人は背広にネクタイである 記念館にある多くの写真を見ても菊池が軍装をしているものは見当たらない。

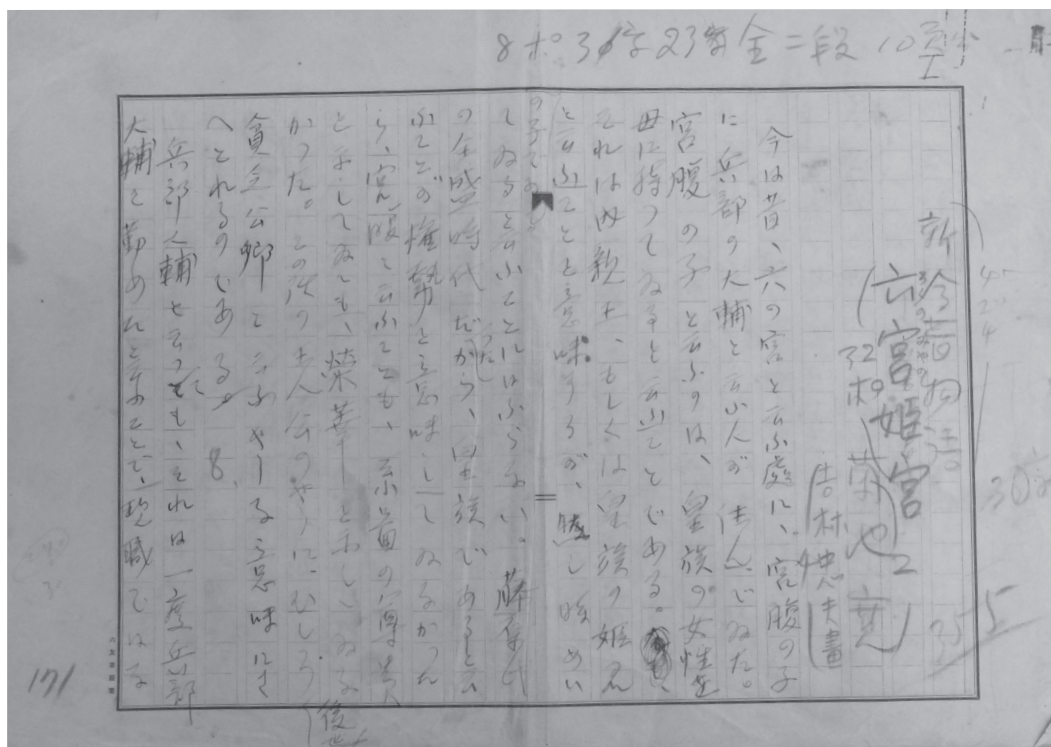


〔写真2〕

馬海松結婚写真（同）

左端は菊池の長女瑠美子氏。（人物の同定は菊池家のメモによる）。





〔写真3〕『六宮姫君』自筆原稿冒頭部分（高松市菊池寛記念館蔵「原稿」（寛自筆）No.100）

「(1) 六宮姫君」の場合は、「六宮姫君」と小さく青鉛筆で書かれた上から、大きく鉛筆書きで「六宮姫君」（「ろくのみやの」）のルビが振られ、また赤鉛筆での32ポの指定がなされる）とあり、また左に「吉村忠夫画」とこれも鉛筆書きで書かれている。さらに、青鉛筆（先の題名記入とは別時か？）で、「新今昔物語」、「菊池寛」の指定が入る。そうしてこれらは本文の菊池のペン書きのものとは、字体もまた別である。

記念館には、『苦楽』連載の『新今昔物語』所収話のうち、「(7) 大雀天皇」と「(9) 狐を斬る」の二編を除く七編の原稿が所蔵されているが、「(6) 伊勢」なども、もとは「花見車」と題されていたことがわかり、興味深い。題目だけが示され、「新今昔物語」の字句は朱筆で割り付け指示と同時に編集者によって書き込まれている場合が殆どだが（この「新今昔物語」の字句がない場合もある）、「(3) 心形問答」などは菊池の筆で、誤って「新古今物語」と振られていたりもする。

以上のことから推察されることとして、「新今昔物語」、さらに「六宮姫君」という題名自体まで含めて、どこまで菊池の意思の反映であったかは確かとはいえない。絶筆原稿も記念館に残されているが、題名も署名もなく、その部分は五行分が空白のままである。

貴重な資料の閲覧、調査、さらに画像掲載に、格別の便宜をお与えいただいた、菊池家、高松市菊池寛記念館のご厚意に深く感謝申し上げます。

**"Konjaku-Monogatari-shu (今昔物語集) "**  
**and Modern Literary Man II**  
**– KIKUCHI Kan's "Koshokumonogatari" and**  
**"Shinkonjakumonogatari" –**

CHIMOTO Hideshi

菊池寛(Kikuchi Kan 1888-1948) is a novelist and playwright, member of the third 「新思潮」 (Shinshicho) . He is also known as editor and businessman who launched 「文芸春秋」 (Bungeishunju). After the Second World War, he was blamed for activities during the war, and banned from public office. He wrote 『好色物語』 (Koshokumonogatari, mainly from "Konjakumonogatarishu") and 『新今昔物語』 (Shimkonjakumonogatari, covered narrative literature including "Konjakumonogatarishu") after the war.

In this paper, I consider why he wrote works on the theme of narrative collections at this time.